

彫刻の彩色

—臼杵石仏群・古園石仏のいわゆる大日如来坐像の彩色の復元をめぐる—

田原迫華（崇城大学）

ルネサンス以来、西洋の彫刻、およびその影響下に発展した近代日本の彫刻は、彫像の彩色を否定してきた。たとえばヴィンケルマンは、「白は最も多くの光を照り返す色であるから、より感得されやすい。それゆえ美しい肉体は、それが白ければ白いほどより美しくなり、それが裸体であれば、実際よりも大きく見える。」と、色彩を排除した大理石像の美しさを賛美している。また、森鷗外は、一八九六年に「彫刻」と題する文章の中で「大理石の像は大抵彩色は用いないことで、若し色をつける時は、全体に同じ色を用いて、すなわち単色にしてその色もあっさりしたものを使うことに決まっております。石像に種々の彩色を施すことは、今では先ず好まぬことであります。」と断言している。

しかし、彫刻の彩色は歴史上多く行われてきており、また今日の彫刻制作においても重要な問題とされている。そこで発表者は、彫刻の彩色の例として、大分県臼杵市の臼杵石仏群・古園石仏のいわゆる大日如来坐像を取り上げる。その復元像制作を試みながら、彫刻の彩色の問題について考察していくのが本発表の目的である。そこで今回は、まず古園石仏のいわゆる大日如来坐像について紹介する。そして発表者による復元作業の現状を報告し、復元像の彩色の問題を大日如来の図像を手掛かりに制作者の立場から検証していく。

大分県南部にある臼杵石仏群は、国宝・国の特別史跡の二重指定を受けている日本有数の屋外石造文化財であり、多様な彩色の痕跡が現在も残されている希少な例である。なかでも古園石仏のいわゆる大日如来坐像（頭部）は、今日なお彩色の痕跡をとどめており、美術作品としても大きな魅力を備えている。しかしながら、その彩色が当初のものであるかどうかは、疑問である。また、臼杵石仏群の年代に関する史料などはほとんどなく、創建の時期、理由など、ほとんど明らかになっていない。ただ、その創建時期については、仏教美術、考古学の観点などからの先行研究によって、平安時代後期と推測されている。さらに、臼杵石仏群は、軟らかい熔結凝灰岩の岩肌に刻まれており、風化が激しく、現状での保存すら危ぶまれており、昭和三十一年から平成五年までに、樹脂を含浸するなど大掛かりな保存修理が行われ、現在に至っている。

発表者は今年の七月より、現地での調査を踏まえて、臼杵石仏群・古園石仏のいわゆる大日如来坐像（頭部）、その復元像の制作をはじめた。対象とほぼ同質の石材を選定して大まかに切り出した後、主に鑿と金槌で彫り進めている。現在、彫りの段階は、顔部分に限定して中彫りに入っている。同時に、残存する顔料の分析を進め、その材料を特定し、石材片に塗って色見本を制作している。そして、できるかぎり同質の材料を用いて彩色の復元を試みている。また、儀軌に基づく同時代の絵画などから、大日如来としての彩色の推定、同時代の仏像との比較を通して、創建当時の彩色に迫っていきたい。